



どれくらいの時間が経っただろうか。

「私と友達になりたいの？死ぬまで無理ね」

エリカはセレナの足を間違って踏んだふりをして背を向けて立ち去った。

「そうね。セレナのことなんか気にしないで。

気分を害がいしたかもしれないけど」

エリカきげんの機嫌を気にした仲間たちはすぐに追いかけた。セレナは頭を少し下げて、

「ごめんなさい」

と繰り返した。

セレナは耐えることに慣れていた。黙って我慢すれば過ぎていくことだから。このようないじな虐めは彼女にとって日常のことだった。